The Lepidopterological Society of Japan

4月9日には，クジャクチョウの種間ナワバリが観察され，activity radius 移動距離の変化から，静止点から周囲に向けて15m程度の往復移動をしていたことが判った．また，その反発行動の起こった地点の範囲から，ナワバリの範囲は行動圏（130.4m²）の内の63.7m²の範囲であったと考えられた．

同年8月31には，ルリタテハ夏型2個体の行動圏が観察された．observation-area curve, activity radius, 移動距離から，2個体の行動圏の面積は31.9m²（L），40.8m²（M）であったと考えられた． L個体はM個体より優勢で，M個体を餌場から追い出して餌場を占有していたことから，L個体のナワバリは餌場の周りの約0.28m²という限られた狭い範囲であったと考えられた．

9. 「奥アマゾン探険，1973」にみられたドクチョウ類をめぐる擬態について 高橋真弓

トラフ型のドクチョウについては，種ごとの多型現象と，これにともなう相互の擬態がみられ，さらにトラフ型のトンボマダラとも「ミューラーの擬態」を示す．これらのトラフ型色彩に対して，無毒の種が擬態する「ベイツの擬態」は，シロチョウ科など多くのグループにひろがっている．この型の擬態はかなり古い歴史をもったものと考えられる．*H. melpomene* と *H. erato* とのあいだには，それぞれの多彩な地理的変異に応じての見事な擬態がみられるが，これはより新しい時代に形成されたものであろう．アマゾン地域では，アカスジ型のドクチョウが高度な「ミューラーの擬態」を示すが，他のグループにこれを模倣するものはすくなく，この擬態はもっとも新しい時代に形成された可能性がある．そのほか，いくつかのドクチョウをめぐる擬態のあることを指摘した．

10. Theclini（ミドリシジミ族）A_1 系統枝の再検討 三枝豊平

白水・山本（1955）のシジミチョウ科 Theclini の系統図では A_1 系統枝は *Artopoetes* と *Laeosopis* を含む B_2 系統枝と，B_1 系統枝に分かれ，後者は *Ussuriana, Coreana, Gonelilia* と *Shirozua, Thecla, Cordelia* の2群に分化したと推定されている．*Ussuriana, Coreana, Artopoetes* の3属に関する限り1齢幼虫の胴部刺毛の形質は上の系統関係を支持するものであるが，*Shirozua* と *Thecla* を含めると著しく不調和になる．*Shirozua* は中胸から第7腹節までほとんど同規的刺毛配列を示し，しかも他の種で中胸にしか残らない DA lenticle をこれらの節に具え，第7腹節に DA 刺毛を残している．また後翅裏面の第6～8条の状態は Arhopalini や *Strymonidia* と共通の原始的な斑紋構成を示している．このことは本属が Theclini の祖先種がこれらの原始的形質を保有していた段階で分化してきたことをあらわしている．*Shirozua* は本族の進化の最も初期に他の属とは独立の系統枝として分化し，幼虫刺毛の羽毛状化や胸脚の伸長，半肉食性等の特化した形質を獲得して現在にいたった属と考えられる．*Thecla* は第6～8条に *Shirozua* と類似した原始的状態を残しているが，AD lenticle が中胸に限定される点は残りの属との新形質共有（synapomorphy）と考えられる．本属は幼虫刺毛や体形に特化した傾向はあるが，それらは *Shirozua* と共通性が少ない．本属は *Shirozua* に次いで他の属の祖先種とは異なった系統枝として分化したものであろう．上記2属を除いた A_1 系統枝はおそらく A_2•A_3 系統枝と姉妹群関係を示すが，A_1 系統枝の中ではまず *Cordelia—Gonelilia* 群と残りのモクセイ科食の4属を含む群が姉妹群として分化したと推定した方が，♂交尾器や斑紋などをより合理的に説明できる．この系統関係の解明には *Cordelia* の生活史の研究が不可欠である．*

11. 照葉樹林のシャチホコガ 中臣謙太郎

照葉樹の典型的な例はツバキである．これに固有なクロシタシャチホコの幼虫は1970年に発見された．ヤブツバキの分布に従って温帯樹林まで入り込み，さらに北方まで成虫が分布するので，ユキツバキをも食樹とするものと考えられる．近縁のホソバネグロシャチホコは，ツバキ科のヒサカキを食樹とする．この幼虫は，1916年に長野菊次郎によって図示されて以来，60年もの間再発見されなかった．1971年，演者は，台北陽明山において，ヒサカキから原亜種の幼虫を発見，長野の図によく合うことを確認した．本邦では，1976年7月上旬，佐渡小木で再発見を果たした．小木は照葉樹林帯で，ヒサカキの多い林は，ツバキ，ウルシ，コバノトネリコが密生し，上部はコナラの喬木が覆う．ツバキ科の樹木は温帯林では，落葉のヒメシャラ，ナツツバキが現れるが，これに固有なオオネグロシャチホコ

---

*【訂正】 蝶と蛾 Vol. 27, No. 3（1976年10月）に下記の誤りがあるので訂正する．

p. 125　　ミドリシジミ類の幼生期の研究（I）
本文 11, 12行目　　symplesiomorphy（誤）→ synapomorphy（正）

（三枝豊平）

NII-Electronic Library Service

The Lepidopterological Society of Japan

は，上記2種と近縁である．また近縁のフタジマネグロシャチホコは，ハイノキ科のサワフタギを寄主植物としている．東亜に多くの種の分化するネグロシャチホコ類の食樹が，ツバキ科，ハイノキ科からどんな展開を見せるか興味深い．

常緑のカシ類に固有なシャチホコガは発見されていない．ホソバシャチホコは，常緑，落葉いずれのカシ類にも広くつく．南九州，大隅半島の基部，高隈山では，アカガシにセダカシャチホコがつく．この成虫は赤味が強く，一見して本州，四国の個体と区別できる．しかし高尾山では，セダカは落葉のコナラ，クヌギのほか，常緑のアラカシにもつく．九州，南西諸島から台湾にかけて分布する赤味の強いセダカは，別種となる可能性もあるが，食性に明らかな違いがあるかどうかは，さらに多くの観察例が必要であろう．ほかに照葉樹林帯に生息する種としては，ナチアオシャチホコ，テイキチシャチホコなどが挙げられるが，寄主植物は全く手がかりがない．

12. 日本産スガ（巣蛾）科総説

森内 茂

スガ科 Yponomeutidae Stephens, 1829 (s. lat.) の上位分類群の系統体系と，28属107種よりなる日本産スガの大要について略説した．日本産の属・種はつぎのようにまとめられる．

I. Yponomeutidae Stephens, 1829＝Hyponomeutidae of authors スガ科
- i. Plutellinae Guenée, 1845 クチブサガ亜科
  - A. Plutellini Guenée, 1845 クチブサガ族………6属26種
  - B. New tribe………………………………………………日本に分布しない
- ii. New subfamily ニセスガ亜科………………………1属9種
- iii. Yponomeutinae Stephens, 1829 スガ亜科
  - C. New tribe ツバメスガ族…………………………1属3種
  - D. Yponomeutini Stephens, 1829 スガ族
    - a. New subtribe ギンバネスガ亜族………………2属3種
    - b. Yponomeutina Stephens, 1829 スガ亜族……16属40種

II. Argyresahiidae Stainton, 1854 メムシガ科………2属26種

詳細は，現在印刷中であり，1977年3月発行の拙著 Moriuti, S., Fauna Japonica, Yponomeutidae s. lat. (Insecta : Lepidoptera). B5, vi＋328＋95頁，95図版＋1原色口絵，27,000円，啓学出版）を見られたい．

NII-Electronic Library Service